

杉本苑子

檀林皇后私譜

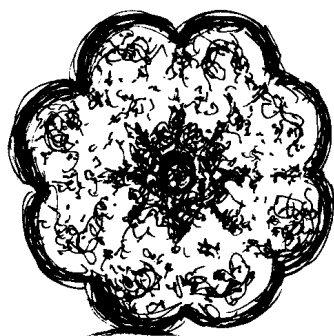
上



檀林皇后私譜

本苑子

上



中央公論社

檀林皇后私譜 上

定価一三〇〇円

◎一九八一

昭和五十六年十一月二十五日初版発行
昭和五十六年十二月二十五日再版発行

著者 杉本苑子

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋一―八―七
振替 東京二二三四
検印廃止

目次

森の奥

7

夕占問う尼

29

蝦夷祝唄

51

闇にひそむもの

75

若菜

98

呪う神たち

121

夜の牡丹

157

遺勅

171

大同元年

194

長恨歌

217

屍臭

248

饒舌な指

263

退位

287

船のうちそと

309

二所朝廷

332

檀林皇后私譜

上

森の奥

1

よく磨きこまれた八花型の手鏡に、晩秋の日ざしが反射して燦き砕ける。背面の孔雀は螺鈿の細片を埋めて描かれ、惜しげもなくその眼に、羽根に、琅玕や紅玉、琥珀などの粒がちりばめられてあつた。

婚約がととのつたしるしに、今朝がた使いの女嬬を介して、神野王子邸から届けられた贈り物だが、鈕には七色の、華麗な組み糸が通され、それはゆるやかに腕にからまりながら、榻に掛ける嘉智子の、裳の膝にまで達していた。

「やはり受け入れたんだな、王子の求愛を……」

目の高さにまで掲げていた鏡をほんの少しずらすと、扉の戸口に立つ逸勢の、こわばった表情を捉えることができた。

案内も乞わず、挨拶さえ抜きにせずかずか私室へ踏みこんでくる無作法を、咎めても咎めて

も改めようとしないう相手へ、無視といういつもの手段で、嘉智子も執拗に対応しようとした。黙りこくったまま鏡を見つづける。逸勢はかまわず卓子の向う側へ廻りこんで来、骨組みたぐましい六尺近い体軀を、足で引き寄せた榻の上へ、投げ出す粗暴さでずしんと落とした。

鏡の中の嘉智子の眉間に嫌悪の縦皺がくつきり刻まれる。上体を斜めにねじったのは、正面きって向き合う苦痛から、せめてわずかでも逃れたいためだが、露骨な忌避の表情をすら、かがやくばかりな美に変えてのける若さかりの驕りは、かえって逸勢の、戦鬪的な氣質に火をつけてしまったらしい。

「仕合せにはなれないよ」

挑みかかる語気で彼は言い切った。なにごとにつけても確信ありげに予見し、断言したがる男なのである。

「つい昨夜だ。高津内親王が、神野王子の二人目の子を安産したけれど、知ってはいまいね」

「え？ みごもっておられたの？ 高津さまは……」

驚きが、虚勢を突き崩すと、たちまち十八歳相応の脆さが露呈した。

「なんだ、懐胎してたのも知らなかったのか」

逸勢の語気に冷笑が滲んだ。

「おめでたいなあ。そんな調子だから嫌われているのを承知で、あえておれは、お節介を焼きたくなるのさ」

「男の子？ 女の子？」

「こんどは皇女だそうだ。うまく生み分けたじゃないか、初めが男児で次が女児とは……。神野王子は三日も前から高津内親王の産所に詰めきって、背をさするやら手を握って励ますやら介抱に大わらわだったと、もっぱらの評判だぜ」

加虐を、快感にしていると思えない舌鋒の、容赦のなさも、逸勢の持つ性癖の一つであった。

いったん、膝に置きかけた手鏡を嘉智子はふたたび取りあげると、

「お優しいからですよ」

強いてのように、さりげなく言った。

「わたしがお子を生むときも、神野王子はきっと同じようにしてくださるわ」

「どうか」

皮肉な視線を、逸勢は娘の背後へ投げた。鏡の反射光がチリチリ慄えながら、壁にも天井にも躍っている。それは嘉智子の不安が、小さな丸い光に凝集して、空間を翔けめぐっている証ともいえた。

「高津内親王とあんたとは、身分に開きがありすぎる。あちらは今上天皇桓武を父に持つ歴とした皇女——。同様、桓武帝のお子に生まれた神野王子とは、腹ちがいの姉弟でいて結ばれた仲だ。この先あんたをはじめ、王子は幾たり妃を持つか知らないが、初恋の相手は格別だろうし、まして高津内親王は第一皇子、第一皇女の母だからね、あとから割り込んだところで二人の愛の語らいの、おこぼれにあずかるくらいがせいぜいだろうよ」

「なにを言いたいのか？」

とうとう我慢しきれなくなつて嘉智子は榻から腰をあげてしまった。立つと、上背があるだけに、胸高に着けた縹緗の裳が、半身の曲線をすりと際だたせて、白檀の繊細な塔を見るようにけだかつた。

「いまさら逸勢どのに哀れまれるまでもないわ。自分のことでも、さんざん考えたあげくの結論ですよ」

「おれは惜しいのさ」

怒りを刷いたことで、いっそう凄艶さを増した従妹の眸から、逸勢はまぶしげに目をそらした。「桓武のお子はお子だが、神野王子は冷やめし食いの次男坊にすぎない。次期の帝位は兄ぎみの安殿皇太子に譲られるものと、はっきり今から決まっている。身分こそ臣下の娘——それも近ごろ、一向に振わない橘氏の一族ではあるけれど、あんたほどの才氣と美貌の持ちぬしなら、帝王の寵妃に配されたつてふしぎはないのだ。なぜ安殿太子ではなくて、神野王子と結ばれることになつてしまったのか……そこが残念でならないのだよ」

「おっしゃりたかつた本音は、それね」

相手の言いざまに劣らぬ嘲りを、せいっぱい籠めたつもりなのに、

「察しがいいな」

いささかも痛痒を感じない顔で、逸勢は厚かましくうなずいて見せた。

「あんたみたいな出来のよい娘は、一族の宝だ。いや、端的に言えば貴重な手駒だよ。いかな名

人でも、持ち駒が悪くては将棋に勝てない。血族門葉を、官界に浮上させてもらうためにも、あなたをむぎむぎ冷やめし食いの閨房になど送り込みたくはなかったなあ」

「あなたがた親類縁者を、出世させるためにわたしは結婚するのではないわ」

「そりやあそうさ。当り前だ。だがね、あなたには宿世の定めがある、天子の母儀に備わる天運があると、あのとき占われたのも事実だぜ」

「本気にしているの？ あんな乞食尼の観相などを……」

わざと呆れ顔を作ってはみたものの、嘉智子の内奥にも、波立つ思いがなくてはなかった。

げんに彼女の父の清友に、卦の予言は的中している。まだ童髪の少年だったころ清友は命ぜられ、鴻臚館へ外賓の接待に出たことがある。たまたま来朝していたのは高麗国からの使節団だったが、相人が一人、団員の中にまじっていて、清友の面上を痛ましげにみつめながら、

「このお子は、三十三歳で大厄に遭うだろう。氣をつけねばいかんな」

つぶやいた。死ぬ、とあからさまに言うのを憚って、表現をぼかしたのだとは、あとで知れた。風邪をこじらせて、清友は三十三の働きざかりに命を失ったのだ。嘉智子はこのとき、四歳であった。

「もっとも、安殿皇太子の妃に召されてお側へあがったところで、薬子夫人がいるかぎり、やはりあなたは齒が立つまいよ。首ったけだそうだから太子は、あの夫人に……」

逸勢は肩をすくめた。人妻でいながら夫を捨てて子らを捨てて、皇太子との不倫の恋に走ったしたたか者ということで、いま、さんざんな不評を浴びている女性である。

「妖婦！」

ときえ恐れをこめて言う声を、嘉智子も耳にしたおぼえがあった。

「年だって、三十を二つ三つすぎているだろう。安殿太子より上のはずだからね。でも、妖婦だなどという非難は、為にする悪声だよ。むしろ薬子夫人はぐうたらな太子のよき補佐役だな。おそろしく聡明だし、魅力がある。弟の妻という立場からすれば、高津内親王と藤原薬子夫人は、義理の姉妹となるわけだが、到底、高津王妃なんか、薬子夫人の足許にも及ばないし、あんたの美しさをもってしても藤原薬子にだけは太刀打ちできない。室咲きの、大事に育てられた花をあんたとすれば、夫人は霧を纏う野薊だぜ。紅紫の花弁を露に濡らして、きりっと咲き鎮まる勁さ、あざやかさに、目を洗われない男はいないよ。そのかわり、うっかり触れると棘にやられる。まあ神野王子の御殿にあれば、やがて否応なく実物の嫂を、あんたも宮中で、目にするに
なるとは思うがね」

「なぜ安殿太子や薬子夫人の名までを、今ここで話題にしなければならないの？」

手鏡を、薄みどりの紗の領巾の端で、嘉智子は包んだ。

「わたしは神野王子と結婚するのよ。高津内親王には関りないし、まして王子の兄上が、どのような恋人をお持ちだろうと知ったことではないわ。神野王子を愛している、だからお側へ上る、それだけで充分でしょ？」

きっぱり言っただけなのに、語尾がふと、ふるえた。自信がなかった。悲さながら意識の隅にこびりついて離れないのは、逸勢が指摘した通り、じつは高津内親王の存在だった。高

貴の出であり二児の生母であるだけでも、抗いがたい圧迫を感じる正室——。むりやりに、それを黙殺する不自然さが、重い滓おりとなって胸底むなぞこに澱みつづけていたのである。

王子の側の、一途いちずな求めに押し切られて、結婚の申し出を受け入れはしたけれど、「愛している」

と、口に出して告げた覚えはまだ、一度もない。それなのに、逸勢いっせうごときの口舌こうぜつにのっぴきならず追いつめられ、逡いためらや、高津その人へのこだわりを残したまま、大切なひとことを言葉にできませんでした。嫌あきらなさ……。縄なとなって自身の言葉が、自身を縛るのさえ無念に思えた。

「もう、出て行って……」

領巾りやうきんの中の手鏡を固くにぎりしめたまま嘉智子は窓ぎわへ立って行き、逸勢に背を向けて低く命じた。

「ここはあなたの屋敷よ。わたしは入居いりぐい叔父さまに育てられた懸人かきりうど……。でも、与えられたこの房へやは私室です。用もないのに居坐いざられては迷惑だわ」

「用はあったさ」

榻たたをきしませて逸勢も突っ立った。

「ひとこと、おめでとうを言いに来たんだ。しかしそんな通俗な祝辞はひっこめよう。真実めであつたか、そうでなかつたかは、夫婦が二人ながら墓へ入つてのちに、はじめて判ることだからね」

扉があつたら、激しい音を立てて閉まつたにちがいない。逸勢がはねのけて出て行つた戸口の

玉簾は、どのような力を加えたところでさらさらと、糸に貫かれた玻璃玉が摺れ合つて鳴るにすぎなかった。嘉智子の耳には、だが、軽やかなその音すらがこたえた。

(また、怒らせてしまった)

悔いが走った。

逸勢と顔を合わせると、なぜ、いつもいつも、喧嘩別れに近い気まぐさに陥つてしまふのか。

幼時、父に死なれ、追いかけて母にまで先立たれた嘉智子は、姉の安子とともに父の弟——橘入居の手許に引き取られ、その慈みの下で大きくなった。入居の嫡男逸勢、弟むすこの永継、永名、姉むすめの御井子、田村子らいと、こたちとも、分けへだてなく扱われたし、三歳年上の逸勢とは、ことにも親しんで、おたがいに血を分け合つた兄とも妹とも思いながら、一つ屋敷うちに成人したのである。

安子と嘉智子のあいだには氏人、弟氏、また異腹の兄に氏公という名の男児がいる。他の伯父たちの家に、別れ別れに預けられて育つたせいとか、じつの同胞でないがらかえって彼らとの仲は疎く、行き来もあまりしていない。

そこへゆくとき逸勢は、嘉智子の無二の遊び相手であり学問の師であり、時に支配者であり奴隷でもあつた。

学塾へ通いはじめるとたちまち孝経、論語、毛詩を暗じ、十三の最年少で大学寮へ進んでからも十日目ごとの句試、年に一回施行される年終試にまで苦もなく合格しつづけ、

「まれに見る神童」